

2. 供試品種 農林21号(縣奨励品種)
 3. 供試薬剤 BHC1%粉劑(鐘紡) DDT乳劑(大東化学)
 4. 薬剤撒布量 BHC 1%粉劑は反当 5kg を共立ミゼットダスターで撒粉, DDT 乳劑は反当 6 斗を噴霧器で撒布した。

調査は1坪分について行つた。

被害調査期日 8月22日

考 察

上表の成績の通り BHC 及び DDT 共相當の効果を認め、特に BHC は両区共効果が顯著であつた。これは BHC が燻蒸的效果を發揮したものである。併し、收量調査がともなわなかつたので、明年度に於て再度試験を行う予定である。

(石川縣立農事試験場)

調査項目 試験区別	A 区			B 区		
	調査莖数	被害莖数	被害莖歩合	調査莖数	被害莖数	被害莖歩合
無撒布區	1,156本	31本	2.68%	1,072本	26本	2.42%
大東化学 DDT 乳劑 0.05% 區	1,124	13	1.15	1,120	16	1.42
鐘紡 BHC 粉劑 1% 區	1,108	12	1.08	1,088	9	0.82

石川縣に於けるイネドロオイムシの發生について

石 崎 久 治 橋 田 久 衛

イネドロオイムシ *Lema oryzae* の發生は本縣に於ては、その分布は殆んど縣下全般に亘り年々の被害は少くない。これ等成幼虫の發生消長は年により異なるが、昭和24, 25年の調査では、南部と北部では根本的に發生型が異なる事が認められ、従つて防除上これを明確にする事が重要な課題である。昭和25年度に、金沢、動橋、羽咋及び輪島の觀察所に於て、調査した成績の一端を茲に報告する次第である。

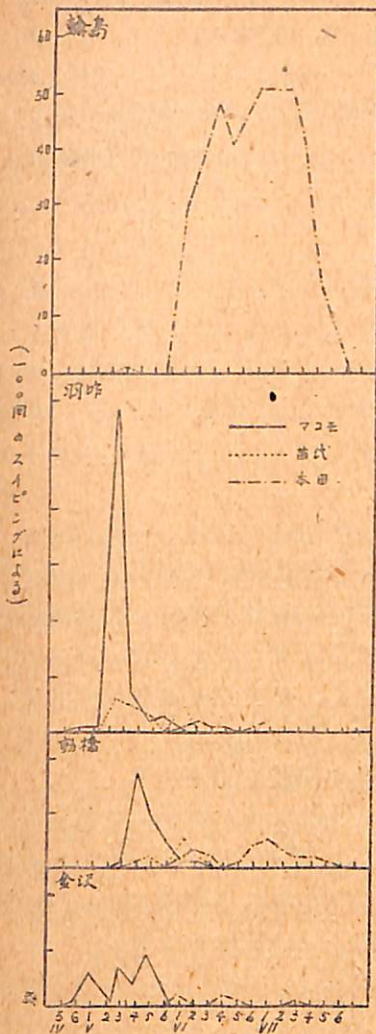
1. 成幼虫の發生消長

成虫の季節的消長調査は農林省指定掬取網即ち、午前11時、100回のスイピングに依つた。その成績は第1圖の如くで、掬取数は各旬の平均値として記した。越年成虫の春季出現は、南部地方が最も早く、金沢では4月29日、羽咋では5月2日、動橋では5月7日、夫々マコモ叢生地に發生を認め、輪島ではマコモに於ける發生は例年見られなく、殆んど苗代の後期に若干認める程度で、

昭和25年度では苗代で5月15日1頭を認め、6月初めより發生が多くなつた。

成虫の發生最盛期は、南部(羽咋、金沢、動橋)では苗代末期の時が最も多く、その過半はマコモ叢生地である、北部の輪島では比較的遅く、本田挿秧後急激に出現し、6月中、下旬が最盛で被害も大きい。これ等成虫の發生は南部では、新年度羽化した成虫との期間の差異は認められるが、北部では、7月下旬迄越年成虫との發生の差は認められない。成虫の終熄日は金沢が最も早く、動橋、羽咋、輪島では8月初旬である故、北部地方の越年期間が南部に比して若干長い事も環境温湿度や色々の因子が關係して居る様に伺はれる。幼虫の發生は早發地帯では5月中旬から苗代で認められ、本田初期が最も大きく、北部では6月初旬の被害は大部分成虫によるものである。

尙本田に於ける成幼虫の加害狀況は第2圖に示す如くで、一般に北部の被害が大きく、成虫最盛



第1図 イネドロオイムシ成虫の發生消長 (1950)

期後、2週間位が幼虫の被害甚大であるが、南部では6月上中旬で、本田分蘗初期の幼虫の被害が多い。故に稲の回復程度が北部では南部に比して小さい。

2. 地勢と發生

イネドロオイムシの發生が常に山間部、山麓地方に多いのは成虫の越冬に適する潜伏地がある爲で、畦畔、堤防附近の發生密度は高い、又マコモ叢生地附近では、秋季積込んだ堆肥中にも成虫の越冬が多く、春季堆肥施用時期にマコモなどへ飛來する事も認められて居る。概して北面或は西面に傾斜した地勢に接した稻田には發生が毎年多い事も(1930年勝又要技師が指適している)筆者等も認めた。

3. 氣象と發生
環境温度や降雪量、降水量等に関係はあるが、特に温度との関係は深い様で、金沢の調査と輪島の調査では月平均気温で1度から1.5度の差異(輪島の方が低い)がある事も春季の成虫の發生に影響するもので、従つて南部では早い。昭和25年は春季高温の爲め南部では昭和24年に比し10日以上も早く、北部よりも15日以上も早かつた。尙北部の山間山麓の草叢地帯の越冬箇所では、比較的気温が低い爲、越冬成虫の休眠が長いのではないかと思考される。

4. 耕種的環境と發生

本害虫も亦耕種的な環境によつて年々の發生消長が異なるもので、特に播種期や挿秧期の早晚とは密接な関係がある。播種期の早い稲には苗代末期に於て越冬成虫の飛來が早く、特に南部地方ではその傾向が認められ、保温折衷苗代等の早播薄播苗には関係が深い。北部では出現期が遅い爲苗代播種期の関係は認められない。又挿秧期と發生の関係では、南、北部共一般に早植で生育の進んだ稲には成虫の飛來が早く、被害も大きい。

5. 成虫の趨光性

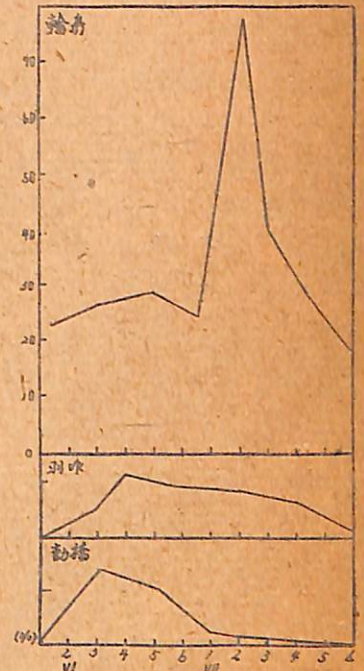
趨光性については余り研究された業績は無く、筆者等が羽咋に於て觀察した結果は第1表の如くである。

第1表 イネドロオイムシ誘殺成績 (1950)

月別	半旬別					
	1	2	3	4	5	6
IV	—	—	0	0	0	0
V	0	0	0	0	0	0
VI	0	0	0	0	0	0
VII	15	35	196	183	2	8
VIII	4	0	0	0	0	0

備考：供試誘殺灯乾式白熱灯 60W

越冬成虫の誘殺は殆んど認められず、新年羽化した成虫は7月から8月上旬に於て誘殺された。この点よりみると気温との関係が最も深い様に想われる。5月の平均気温は17.6°Cに比し、7月では25°Cで7.9°Cの差が有る。勿論月平均では考察も出来無いが夜間の気温の問題で、泥負虫の趨光反應も高温により活動が敏感となる爲めではないかと想われる。



第2図 本田に於ける成幼虫の加害狀況 (被害率, 1950)

この点についてもなお一層研究を續行するつもりである。

引用文献

1. 石川県立農事試験場：稲泥負虫の研究成績。

昭和9年8月。

2. 池屋重吉・小島由雄：稻葉潜蠅と稻泥負虫。北陸農業雑誌，第5号，昭和24年。

3. 加藤陸奥雄：イネハモグリバエとイネドロオイムシの生態と防除。農園，第26巻第1号。

(石川県立農事試験場)

螢光灯の1比較法

高 木 信 一

従来圃場に併立して誘虫力を比較する機会が多いが、たとへ毎日その位置を變換するとしても充分能力に差がない限り本當の比較は出来ない。その理由は作物が時間的に又位置的に變化する事と、毎日の氣象が決して同じでないからである。

此處に環境的一化の方法として廻轉が考えられるのであるが、一応次の様な欠点が考えられる。

1) 多くの灯を近距離に設置するのであり、2~3分で1廻轉するのであるから、虫がその意志(?)に反して隣の灯に飛び込む恐れがあるのではないか。

2) 集團灯として1次の光源として作用し、次に第2次の光源として作用するから、低能力のものも比較的有利に働く事になるのではないか。

3) 以上の外配光、亂数的虫の飛込み等が考えられる。

1) については若し隣灯に惹かれる量との間に

差があれば必ず何か差が出る。虫毎に固有の分散を調査しておけば後から計算に依り補正が出来る。余が2化螟蛾に對して行つた廻轉の早さは2化螟虫級では丁度良く、キリウチ級には早すぎ、ガムシ級には遅すぎる様に見える。

2) の問題は密度の問題に歸着する。

3) 配光の問題は空間に何か被照体を假設して考へている場合の外、實際的には問題とならない。亂数的飛込を考へるなら廻轉に依り各灯の誘殺数は等しくなる筈。(現實に反する)。

以上の理由から廻轉式の螢光灯比較法は合理的と考えられるが、60w白色電灯との比較に於て計算値は従來の價に極めて近いものとして現わされて来る。尙スペクトロメーターに依つて分光寫眞を撮り新潟縣に入つている9種類について検討した結果も廻轉式の成績を裏書きするものであつた。

(新潟縣立農業試験場)

昭和25年度新潟縣に於けるイネキモグリバエの發生

藤 卷 正 司

1950年度新潟縣に於けるイネキモグリバエの發生は岩船郡、北蒲原郡、並に西頸城郡を除く各地に多く激發した(被害程度は新潟農試1950年度病

虫害發生程度表示基準による)。本虫は新潟縣に於ても3化性が認められ、その羽化最盛期は第1化期5月18~20日、第2化期7月17~21日、第3